

★香川県教育委員会研究団体等研究委託事業★
—さめきの授業 基礎・基本 実践事例集—

「主体的・対話的で深い学び」 の実現に向けた実践事例集

小学校編



平成30年2月
香川県教育委員会

目 次

I はじめに	1 p
--------	-----

II 実践例

<主体的な学びの視点からの授業改善例>

- 国語に苦手意識をもつ児童も、進んで学習に参加するためには(国語) 2 p
- 「教えられるポイント」から「学びたいポイント」への転換は(書写) 3 p
- 児童が、主体的に学習に取り組むには(社会) 4 p
- 問題解決の際に進んで図を利用しようとする態度を育成するためには(算数) 5 p
- 児童が目的意識をもって学習するためには(理科) 6 p
- 児童が意欲的に栽培活動に取り組むためには(生活、総合的な学習の時間) 7 p
- 新しい課題に気付かせ、学習意欲を持続させるには(音楽) 8 p
- 主体的に表現を工夫させるためには(図画工作) 9 p
- 家庭生活への関心を高め、学んだことを生活に生かそうする力を育むには(家庭) 10 p
- クロールの息継ぎを、主体的に学び合う中で身に付けるためには(体育) 11 p

<対話的な学びの視点からの授業改善例>

- スピーチの内容を子ども自身がくわしくするための、有効な手立ては(国語) 12 p
- 児童が目的意識をもって文字の整え方を調べ、それを生かすためには(書写) 13 p
- 対話の対象を広げ、必然性のある対話にするには(社会) 14 p
- 対話を通して考えを広めたり、深めたりするには(算数) 15 p
- 児童の多様な考えをまとめるには(理科) 16 p
- 主体的な対話を促すためには(生活、総合的な学習の時間) 17 p
- 音楽活動を中心に互いの考えを広めたり深めたりする対話を実現させるためには(音楽) 18 p
- 共に考えを深め合う対話を実現させるためには(図画工作) 19 p
- 児童の対話から、本時身に付けさせたい知識・技能を焦点化していくためには(家庭) 20 p
- 運動の課題解決に向けて、主体的に対話できる授業を創るには(体育) 21 p

<深い学びの視点からの授業改善例>

- あらすじのまとめ方を深く学ぶためには(国語) 22 p
- 点画のつながりの大切さについて、理解を促すには(書写) 23 p
- 日本の歴史や伝統への理解や関心を深めるには(社会) 24 p
- 事象に潜む規則性を見付け出し、楽しみながら深く学ぶには(算数) 25 p
- 児童の深い学びを実現するためには(理科) 26 p
- 児童の考えや思いを基に、学びを深めていくためには(生活、総合的な学習の時間) 27 p
- 自らの思いや意図を表現させるためには(音楽) 28 p
- 鑑賞活動で互いの見方を深めさせるためには(図画工作) 29 p
- よりよい生活を目指し、課題の解決法を考えさせるには(家庭) 30 p
- 技の習得時間を短縮し、活用・探究まで到達させるためには(体育) 31 p

III おわりに	32 p
----------	------

I はじめに

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導が求められています。そして、授業改善の具体的な内容については、新学習指導要領解説総則編において、以下の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されています。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

本冊子は、香川県小学校教育研究会に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する実践研究を行っていただき、提供いただいた75事例のうち30事例をまとめたものです。この冊子が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、現職教育や教科部会等で活用されることで、より、目の前の子どもの実態に即した授業改善が充実していくことを願っています。

なお、本冊子で紹介できなかった事例については、県教育センターのホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

Q 国語が苦手な児童も、進んで学習に参加するためにはどんな工夫がありますか？

A 考えるための観点を与え、思考ツールで考えを視覚化させましょう。

本時、こんな力を育てたい

叙述を基に、登場人物の人物像を捉える力

本時の流れ

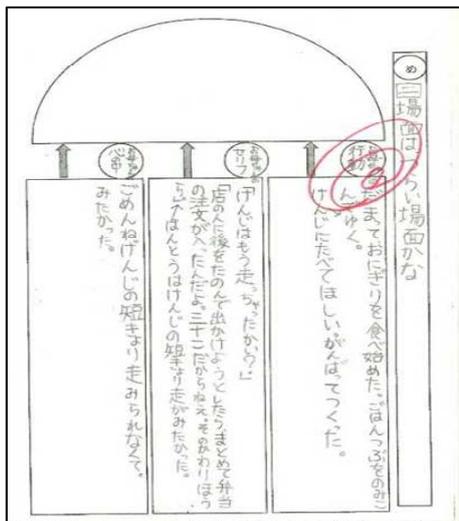
1 めあてを確認し、登場人物3人から、児童が自分の考えたい人物1人を選ぶ。

2 選んだ人物について、変形クラゲ・チャートを使って、自分の考えを書く。

3 同じ人物を選んだ友達とグループを作って話し合い、グループの代表意見を作る。

4 全体で発表し合う中で、それぞれの人物との関わりを確認していく。

【変形クラゲ・チャート】



【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

国語は苦手。捉えどころがなく
て……。
何を見つけたらいいの？
何を書いたらいいの？



まず、登場人物3人の中から、ある場面において自分が考えたい人物を1人選びました。そして、その場面が悲しい場面かどうか確かめるために、人物の悲しさを表している部分と悲しくない部分を見つけていきました。その際、「変形クラゲ・チャート」を活用しました。

ここがポイント！ 教師の支援

文章中から、言葉を見つけて想像するためには、その拠り所となる「観点」が必要です。そこで、変形クラゲ・チャートの足を3本にし、「見たこと」「聞いたこと」「思ったこと」を書き出すようにしました。さらに、「見たこと」の具体的な観点として「表情」や「行動」、「景色」を、最初は教師が示し、想像の根拠となるようにしました。そうすることによって、文章中から探せばよい言葉が明確になり、国語の苦手な児童も自分の考えをもちやすくなりました。

次に、同じ人物を選んだ友達とグループを作り、自分の見つけたことや想像したことを発表し合いながら、グループの代表意見を作っていました。友達の考えが「クラゲ・チャート」上に整理され視覚化されているため、互いに分かりやすく、共通点や相違点を見つけるのも容易になります。

最後に、全体の話合いの中で、他の人物との関わりを確認していきました。

＜学習後の児童の感想＞

教科書の文章の中から、何を見つけたらいいかがよく分かったよ。
友達と比べると、同じ言葉を選んでいても、理由が違うときがあって、なるほどと思ったよ。



Q 「教えられるポイント」から「学びたいポイント」へどのように転換させればよいですか？

A 児童自身が「ミニ先生」となって活躍するグループ活動を取り入れてみましょう。

本単元、こんな力を育てたい

「みんなのために」という意識の下で、文字の細部まで比較し、正しく書き分けるポイントを伝え合う力

本単元の流れ

1 平仮名、片仮名、漢字、数字を比較する中で、似ているために別の文字に捉えられがちなものを探す。

2 それらを3～5名程度のグループごとに分担し、間違えやすい文字の細部を調べる。そして、正しく書き分けるためのポイントをまとめる。

3 みんなに伝えるために、発表準備（間違ってしまう例、ポイント、実際に書く場面等）をする。

4 グループごとに「ミニ先生」として発表し、それを受けて書く活動を展開する。その結果に関して意見交換をするなど学び合いを進める。

【授業の概要】

教師主導の授業では、児童は受け身になりがちです。この点を踏まえ、児童自身が「調べよう、伝えよう」と主体的に活動し、発表へと展開することによって、「よく聞こう、しっかり学ぼう」とクラス全体を高めることをねらった実践事例です。

【本単元の学習】

＜学習前の児童の姿＞

漢字ノートみたいに、直すところを担当の先生が教えてくれるのかな？



2年生では、学習する漢字が増えるとともに日常で書く文字量も多くなります。また、速く書くことが求められる場合もあり、次のように字形が乱れて別の文字にとらえられてしまう課題が出てきます。



👉 ここがポイント！ 教師の支援

課題となる事例については、児童が日頃書いている文字からいくつか取り上げ、それを基に他のものを探すようにします。〈グループ数+1〉の事例が集まったところで、そのうちのひとつについて、後のグループ活動のモデルになるように、細部を調べて書き分けるポイントをまとめます。そして、教師が発表児童役となり、聞いた側がそれを基に書き分けてみて、質疑応答等の意見交換をします。

以上の活動を、児童が「ミニ先生」となり、グループ発表形態で順次学習を進めます。ここで重視したいのが、発表者と聞き手双方にとって「主体的な学び」を促す言葉かけです。発表者には「みんなポイントをすごく知りたがっているよ。」などと、また、聞き手には「みんなのためにとてもくわしく調べてくれているよ。」などと相手意識を高める支援が大変効果的です。

＜学習後（約1か月後）の児童の感想＞

発表者の視点から

- ・自分がミニ先生で発表した文字は、今もずっと気を付けて書き分けています。
- ・他にも間違えやすい文字を見つけたので、みんなに発表したいです。

聞き手の視点から

- ・ミニ先生から聞いたことは、今でもよく覚えていて、そのように書いています。



Q 児童が、主体的に学習に取り組むには、どのような工夫がありますか？

A 児童一人一人の生活体験や地域への思いを生かせる課題を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

地域の様子には場所によって違いがあることに気付くとともに、地域の一員として、よりよい町づくりについて考えようとする力

本時の流れ

1 地域の方から聞いたことを短冊にまとめて整理する。

2 短冊や自分たちの生活体験をもとに、「おもてなしマップ」に書き込む内容をグループごとに考える。

3 グループで考えたことを全体で発表し、考えを深める。

4 友達との交流を通して学んだことなど、本時の学習の振り返りをする。

【本時に至るまで】

社会科の学習を始めるにあたって、「どうして社会科の勉強をするのか」、子どもたちと一緒に考えました。そして、「よりよい社会をつくっていくために学習する」という目的を共有し、主体的な学習になるよう取り組みました。

また、児童の生活体験や地域への思いを生かし、児童が「やってみたい」「できるかもしれない」と感じるとともに、正解のない多様な考えが表出する課題を、「単元を貫く課題」として設定することで、学習意欲を単元全体で継続させようと考えました。「地域について調べたことをまとめ、地域のよさが伝わる『おもてなしマップ』を作り、地域の人に発信しよう」という単元を貫く課題を設定しました。

ここがポイント！ 教師の支援

本単元の内容のねらいは、「地域の様子は場所によって違いがあることを考える」ことです。そこで、「その場所は、他の場所とどんな違いがあるかな」と比較させたり、「他の場所や人とどんなつながりがあるかな」と関連付けたりする発問を行いました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

地域について調べ分かったことを地図にまとめてみたよ。でも、このままでは地域のよさは伝わらないな。私たちにしか作れない「おもてなしマップ」にするためにはどうすればいいかな？



「おもてなしマップ」



この場所は、「もっとたくさんの人に来てほしい」ことを伝えたいな。



この場所は、「これからもみんなで守っていききたい」ことを書いたほうがいいな。

ここがポイント！ 教師の支援

児童が生活の中で感じている素直な体験や思いを大切にすることが、主体的な学びにつながる。

<学習後の児童の姿>

自分たちにしか作れない「おもてなしマップ」にするためには、私たちが生活の中で感じているその場所の特ちょうや、地域の人たちの思いや願いを入れればいいね。みんなの「この地域のこんなところが好き。」という思いをマップに入れて、たくさんの人に来てほしいな。



Q 問題解決の際に進んで図を利用しようとする態度を育成するためにはどのような工夫がありますか？

A 演算決定するとき、図を使う良さを実感できる場を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

(逆思考の問題において) 問題場面の数量関係をテープ図に表し、テープ図をもとに正しい演算決定をする力

本時の流れ

1 前時の問題 ($\square + a = b$) を振り返り、本時の問題文を読む。

学習課題「テープ図をかいて『かくれた数』をもとめよう」

2 本時の問題 ($\square - a = b$) をテープ図に表し、「かくれた数」を求める式を考え、「かくれた数」を求める。

3 今まで学習した4種類の問題とテープ図、式を提示し、共通点について話し合う。

4 練習問題に取り組む。

【単元の概要】(全4時間)

本単元では逆思考の4つの類型の問題を、テープ図を利用して解決していく学び方を習得します。

増加や減少する問題場面で、そのまま演算決定につなげてしまう児童がいます。そこで、テープ図をもとに考えると正しく演算決定できることを学び、図を使うことのよさを実感できるようにします。

【本時の学習】(4時間目)

<学習前の児童の姿>

今日も「かくれた数」を見つけて、求めるよ。

ここがポイント! 教師の支援

◎ テープ図に表すよさを感じる場を設定します。

<本時の問題>
① 子どもがあそんでいます。
② そのうち13人帰ったので
③ (のこりは)18人になりました。

「かくれた数」が「はじめの数」の時はひき算で求めたよ。(白帽)

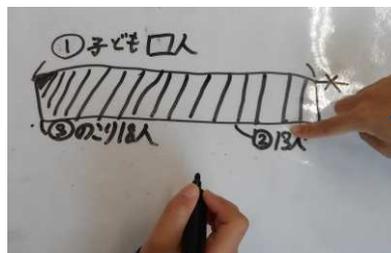
たし算だと思ふ。(赤帽)

帰るお話はひき算だ。(白帽)

分からない。(無帽)

たし算の人も、引き算の人も困っている人もいるね。どうしたらいいかな。

テープ図をかくとできるよ。今日もテープ図をかこう。



「はじめにいた子どもの数」は「残った子ども」に「帰った子ども」をもどすから、たし算で求める。

◎ テープ図を読み取るよさを感じる場を設定します。

テープ図と式だけを提示し、「気が付くことはない？」と尋ねます。

「かくれた数」がテープ図ぜんぶの時はたし算、ぜんぶじゃない時は、ひき算だ。



再度、問題文だけを提示し、たし算か、ひき算か尋ねます。読んだだけでは分かりづらいことを確認した後でテープ図を提示すると、早く正しく演算決定ができることを実感できます。

<学習後の児童の感想>

作ったテープ図を見ると、たし算になるか、ひき算になるかがすぐに分かるよ。



Q 児童が目的意識をもって学習するためにはどのような工夫がありますか？

A 自然事象と自分の関わりが意識できる単元化・教材化をしましょう。

本時、こんな力を育てたい

植物の成長条件を確かめる実験の計画を立案する過程を通して、段階的に条件を制御する能力

本時の流れ

1 育ちの違う三つのキュウリの苗を比較して、本時の学習問題をつかむ。



2 キュウリが元気に育つために必要な条件を予想して整理する。



3 2で整理した条件と成長との関係を調べるための実験計画を立てる。



4 本時の学習を振り返り、次時への意欲をもつ。

＜学習後の児童の感想＞

② 条件制御は同じ物で同じ条件にするけど、一つだけ変えることが前よりずっと分かった。これを、つかって、もっと色々なことをしていききたい。

③ 条件制御 なんとなく分かってきました。意味が分かってくると、授業が楽しくなります。と覚えておきます。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

発芽したキュウリが育って本葉が出てきたね。これからキュウリがより大きく成長するためには、どうすればいいのかな。



ここがポイント！ 教師の支援

【もぎたてキュウリをかじりたいという強い目的意識の下、条件制御の考え方を活用しながら、問題解決をしていく学習】



一人一鉢栽培しているキュウリ

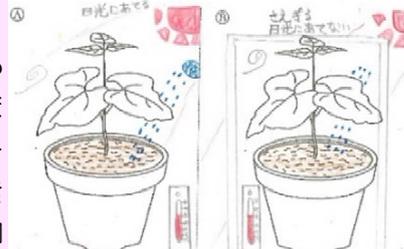


キュウリを観察する児童

上記の写真のように、キュウリを中心教材とし、一人一鉢栽培で観察・実験を行うようにしました。

児童は、「もぎたてキュウリをかじって、店で買ってきたのとは違う新鮮な歯ごたえとおいしさを味わいたい。」という強い目的意識をエネルギーとして、自分が育てているキュウリを成長させるために必要なことを探る問題解決を主体的に展開していきました。

植物の成長条件を確かめる実験計画を立てる際には、まず一人一人が右のようなワークシートにことばや絵を描きこんでいくことで、条件制御についての自分の考えを表現しやすくなりました。



実験計画用ワークシート



アイテムカード



実験計画をホワイトボードに表出

さらに、グループでの話し合いにおいては、各グループにワークシートと同じ図が書かれてあるホワイトボード(写真右)を配布し、アイテムカード(写真左)を用いて条件制御の実験計画が表現しやすいうように工夫しました。

以上のように、児童が追究して充実感や達成感を感じられる教材と出合わせることで、目的意識をもって主体的に学習に取り組むことができるようにしました。

Q 児童が意欲的に飼育や栽培活動に取り組むには、どのような工夫がありますか？

A 教室に図鑑や園芸書を用意して自由に見られるようにし、自分で育てたい野菜を決められるようにしましょう。

本時、こんな力を育てたい

野菜を育てることに興味をもち、収穫への期待や思いを考えて、自分で育てる野菜を決める力

本時の流れ

1 図鑑や園芸書を見て、野菜の苗の植え方や、世話の仕方などについて調べる。

2 自分が育てたい野菜を選んだ後、その理由や、どのように育ててほしいか、楽しみなこと、心配なことを考えて書く。

3 同じ野菜を選んだ児童同士でグループを作り、意見交流をする。

4 友達との交流を通して、野菜を育てる際の自分の考えを振り返る。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

おいしいから、ミニトマトを育てようかな。



👉 **ここがポイント！ 教師の支援**

図鑑や園芸書を用意して、休み時間も自由に見られるようにしました。授業が始まる前から、興味をもって園芸書を見ている児童や、友達と楽しそうに会話しながら図鑑を見ている児童の姿が見られました。

授業の導入でも、図鑑等を見る時間を設け、自分たちで野菜の苗の植え方や世話の仕方を見付けられるようにしました。

その後、ワークシートに「選んだ理由」「どのように育ててほしいか」「楽しみなこと」「心配なこと」などを書き、発表しました。それぞれの理由等を交流することで、自分の野菜に対する思いを深めました。「おいしいから」「好きだから」という意見の他に、「苦手だけど、自分で育てたら食べられるかも」「家族がピーマンが好きだから、収穫して喜ばせたいな」「収穫したオクラを味噌汁に入れて食べたいな」などの様々な意見を聞くことで、「私もAさんのように野菜のプレゼントがしたい」など、「自分が選んだ野菜を大切に育てていきたい」という気持ちを強めることができました。



【児童が書いたワークシート】

＜学習後の児童の感想＞

図鑑に育て方が載っていたよ。収穫したら、家族に食べてもらいたいな。ミニトマトのサラダにして食べよう。虫に食べられないように、毎日世話を頑張るぞ。



クラスや学校規模に応じて、図鑑で野菜について調べた後、種苗店に決まった金額のお金を持っていき、その金額の中で買える苗を選んだり、種苗店の種の売り場で店員さんに相談しながら育てやすい苗を自分で決めたり、お家の人と一緒にスーパーマーケットや種苗店に行き、家族のアドバイスを聞いて家族の食べたい野菜の苗を選んだりするなどの工夫をすることで、さらに意欲的に活動に取り組むことができます。

Q 新しい課題に気付かせ、学習意欲を継続させるにはどうすればいいですか？

A グループ活動の中で意見交換をくり返し行う場を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

思い描く様子を楽器の音色や強弱、音の重なりなど、音楽のもとを用いて表現する力

本時の流れ

1 前時、グループ発表をしたVTRを視聴し、前半3グループの改善点を確認する。

2 本時のグループ発表を行い、残り後半3グループの改善点について意見交換を行う。

3 グループごとにアドバイスを基に話し合い、改善点を吟味し、よりよい音楽を考える。

4 話し合い、工夫することでより良くなった音楽の発表を行う。

【授業の概要】

ラテン楽器に触れ、曲に合わせて、演奏する学習です。

ここでは、自分たちが思い描いた様子に合わせていろいろな楽器の音色や組合せを考え、演奏する発展的な学習を設定しました。自分の表現したい様子を選択し、同じ様子を選択した者で楽器や音色などを考えたり話し合ったりする活動を積極的に取り入れるようにしました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

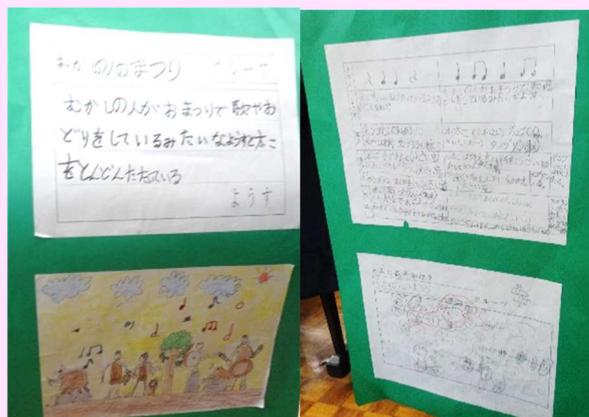
グループのみんなで考えた様子は音楽を通して伝わるかな。音色や強弱、音の重なりを使ってしっかり表現するよ。



グループ発表を行い、互いにアドバイスをし合う場を設定しました。各グループは自分たちが考えた様子に合わせて楽器を選び、リズムを選択して演奏しました。

ここがポイント！ 教師の支援

「花火」という様子であれば「打ち上げ花火」と「線香花火」というように具体的な様子を考えて音で表現していきましました。発表後、自分たちの様子に本当にぴったりかどうかを考えるために、もらったアドバイスを基に、グループの話し合いタイムを設けました。実際に音を出して演奏してみたり、違う楽器で比較してみたりしながら、「自分たちが演奏したい様子」に近いのはどちらかをしっかり考えさせるようにしました。



思い浮かべた様子を絵や言葉で表現しました。

＜学習後の児童の感想＞

同じ様子を表現するのにもいろいろな音の楽器を用いたり、演奏の方法や強弱を変えたりして工夫するのが楽しかったよ。自分たちでしっかり考えていたけど、アドバイスを参考にしたらイメージにもっとぴったりの演奏になったよ。



Q 主体的に表現を工夫させるためには、どのような手立てが必要ですか？

A 表現を試す場を保障し、一人一人が課題解決の見通しをもてるようにしましょう。

本時、こんな力を育てたい

形や色（明暗）、組合せに着目して光の表現の面白さを捉え、そこから表したいイメージを見出す力

本時の流れ

1 夜光シートにどのように光を当てると面白い模様（残像）が表れるか考えながら試す。

2 活動1で面白さを感じた表現とその表し方を交流する。

3 活動1・2を通して得た気付きをもとに、再度、どのように光を当てると面白い模様が表れるか試す。

4 本時の振り返り（面白いと感じた表現やその表し方、見出したイメージ等）をし、次時のめあてをもつ。

【題材について】

光を当てた部分だけ、光の模様が残る「夜光シート」という素材を用います。光の残像は、時間がたてば消えて元に戻るため、何度も表現を試すことができます。また、特別な技能を必要としないので、どの子どもも様々な表現の可能性を探ることができます。面白いと感じた光の模様を子ども自身がデジタルカメラで記録していくことで、表現の変容を感じ取ることができます。

【本時の学習】

児童は、以下の課題意識をもって学習をスタートしました。そして、児童自身が課題解決の見通しをもつために、自由に表現を試す場を保障し、自分なりに面白いと感じる表現やその表し方を見つけていきました。

＜学習前の児童の姿＞

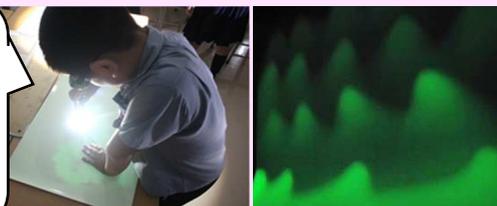
光の当て方によって、表れる光の模様の感じが様々に変わるね。どうすれば面白い光の模様が表れるだろう。



ここがポイント！ 教師の支援

「多様な表現が可能」「何度も試せる」等の教材の特性が、主体的な学びのための大きな支援になります。そして、表現を自由に試す時間を確保する中で、「わぁ！」「きれい！」等のつぶやきが見られた児童に、「なぜそう感じたの？」「どのように懐中電灯の光を当てたの？」と問いかけます。その問いかけによって、児童は、「懐中電灯の光を～すると、…な感じの光の模様が表れてきれいだよ」等、「形」「色（明暗）」「組合せ」の視点に着目して、表現の面白さを感じ取るようになります。そして、全体交流において、個々が感じ取ったことを整理しながら、面白い光の表現を表すための視点を共有していきます。視点を共有した上で、再度、試行錯誤する場を保障することで、児童は、表したいイメージを見出し、見通しをもって活動を展開するようになります。

懐中電灯を揺らしながら左右に動かすと、月明かりが反射した海の波のようできれいだ。



【表れた光の感じからイメージを見出す児童】

＜学習後の児童の感想＞

光の当て方を変化させると、光の模様にも変化が表れて面白いよ。「形」や「色（明暗）」などに注目すると、イメージが膨らんできたよ。わたしのイメージは～だから、懐中電灯の光の当て方を…するとよさそうだ。



Q クロールの息継ぎを、主体的に学び合う中で身に付けるためにはどのような工夫がありますか？

A 児童が息継ぎへの課題意識がもて、全員で解決できるような学習場面を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

記録の伸びの合計をグループ間で競い合うことで、技能差に関わらず、児童が主体的に学ぼうとする力

本時の流れ

1 クロールで続けて泳ぐための息継ぎのタイミングを見付ける

2 模型等を使い、よりよい息継ぎのタイミングを全員で予想する。

3 グループごとに友達の動きを見合いながら、姿勢が崩れずに息継ぎできるタイミングを見付ける。

4 記録測定を行い、記録シート（グラフ）に個人とチームの伸びを残す。

【授業の概要】

水泳では、技能差や経験差から共通課題を設定することが難しいことが多いです。そこで、泳げる距離ではなく、伸びた（泳げるようになった）距離を記録することで、全員の興味や関心を高め、進んで学習できるようになります。

毎時間の記録を残す際に、グラフ化する等、視覚化することで伸びが分かりやすくなり、さらに意欲を高めることもできます。

単元を通してグループ対抗にすることで互いの動きを見合ったりアドバイスし合ったりするようになります。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

息が苦しくなって続けて泳げない。いつ息継ぎすれば続けて泳げるのだろう。



「8かき（クロールで手だけを8回動かす）で、泳げる距離を伸ばそう」という共通課題で学習を進めると、必ず「息が苦しい」「息継ぎせずには泳げない」という言葉が児童から出てきます。この言葉を裏返せば「息継ぎできれば距離が伸びる」「息が続けばもっと長く泳げる」ということです。

児童の意識を息継ぎに向けることで、全員の共通課題として「息継ぎ」の学習を進めることができます。高学年2年間の系統を踏まえて、5年生では、「いつ息継ぎをするか」というタイミングに絞って学習を進めます。

ここがポイント！ 教師の支援

運動している自分の姿は見えないため、イメージと実際の動きには大きなズレがあることが多いです。体育の他領域ではICT等活用によって視覚化することができますが、水中の動きを視覚化することは難しいです。

そこでグループやペアの友達と見合いながら学習を進めます。単元を通して伸びの合計をグループ間で競い合うことで、自然にお互いの動きに関心をもち、見合ったりアドバイスし合ったりするようになります。

☆今までにみんなが見つけてきたポイントができていますか、チームで確かめ合おう

ポイント	けのびの姿勢はできているか	手を大きく強くかけているか	グーッと進んでいるか	手をかいている途中で息つぎできているか	顔を上げる時間が長くなりすぎているか	かいていない手はのびているか	足がしずんでいないか
できているか							

【できている…○ もう少し…△ できていない…×】

【動きのこつチェックシート】

児童が見つけた動きのこつを図のようなチェック表にすることが友達の動きを観察する際の視点になります。友達にチェックしてもらった表を見ることで、自分では気付かなかったポイントに気付くこともできます。

<学習後の児童の感想>

「体の下から後ろに手があるときに、息継ぎするといい」と教えてもらって、泳げる距離が伸びたよ。



Q スピーチの内容を子ども自身がくわしくするための、有効な手立てはありますか？

A 様子をくわしくする観点を子どもと一緒に考え、その観点に沿って思い出させましょう。

本時、こんな力を育てたい

様子をくわしくする観点に沿って、話すことの順序を考え、構成する力

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

夏休みの思い出をみんなに話したいな。スピーチをくわしくするためにはどうしたらいいのだろう。



本時の流れ

1 スピーチの「始め」「中」「終わり」の「中」をくわしくすることを確認する。



2 「中」をくわしくするために入れるとよい観点について考え、出し合う。



3 くわしくするために使いたい観点を付け足し、スピーチを友達と聞き合う。



4 本時の学習を振り返り、他の題材でも、必要な観点に沿ってスピーチをしてみたいという意欲をもつ。

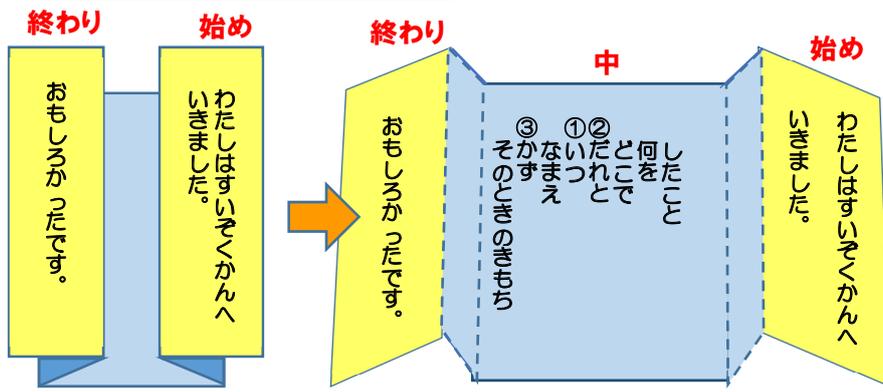
教科書の例は、「始め」「中」「終わり」の三部構成になっており、それぞれ「したこと」「その時の様子」「思ったこと」をまとめています。前時では、題材を選んで「したこと」「思ったこと」の2文で表現しました（【ワークシート①】）。

ワークシート①を開くと「中」の部分が現れるようになっていきます（【ワークシート②】）。「中」の部分を付け足すとスピーチの内容をくわしくすることができることに気付かせ、本時は、「お話をもっとくわしくしよう」というめあてのもと、交流の場を設定しました。

ここがポイント！ 教師の支援

まず、教師が2文でモデルスピーチをし、児童の『話をもっとくわしく聞きたい。』という気持ちを喚起した上で質問タイムを設定します。そして、「どこに行ったのですか？」などの児童の質問から、「どこで」「何を」「だれと」「その時の気持ち」など、スピーチをくわしくする観点到気付けていきました。さらに、数名の児童のスピーチを同様にすることで、「いつ」「名前」「数」「大きさ」「形」など、他の観点も見つけることができるようにしました。

続けて、見つけた観点から自分の題材に合うものを選び、順番をつけさせました。子どもたちは、観点到に沿ってスピーチの内容を付け足して聞き合うことで、「中」をくわしく話す良さを実感していました。



【2文のワークシート①】

【中を付け足したワークシート②】

＜学習後の児童の感想＞

友達に「くわしくなったよ。」と言ってもらえて、うれしかったよ。他のお話のこともくわしくしてみんなに話してみたいな。



Q 児童が目的意識をもって文字の整え方を調べ、それを生かすためにはどうすればよいですか？

A 児童相互に役割分担し、ジグソー学習形式で学び合う活動を展開してみましょう。

本単元、こんな力を育てた

グループ内で伝えるという目的意識を持って漢字の部首の形等について調べ、字形の整え方の原理・原則を理解し、それに沿って書く力

本単元の流れ

1 漢字辞典等を活用して、部首（～へん、例：「木へん」と、元の漢字（例：「木」）で構成される熟語を探す。

2 熟語が6個（それぞれ別の部首から作られたもの）集まったら、それらを6人グループ内で1個ずつ分担する。

3 同じ熟語を担当した児童が集まり、元の漢字とへんを比べてどのように変化しているか話し合いながら調べる。

4 グループに戻り、調べて見つけた変化をメンバーに伝え、実際に毛筆で書いてみる。これを6個の熟語ごとに順次進める。

【授業の概要】

限られた児童ではなく、すべての児童が活躍しながら学び合うところが、「対話的な学び」の視点に立つ大きな意義だと捉えます。そこで、いろいろなパターンがある左右の部分の組み立て方に関して、ジグソー学習形式が適していると考え、その可能性を探ってみた事例です。

【本単元の学習】

<学習前の児童の姿>

みんな、文字の整え方のきまり（原理・原則）を見つけるのが早いなあ。いつももう少しで、見付けられそうなんだけど…。

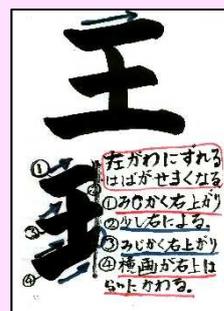


4年生で漢字辞典の使い方を学習することもあり、児童の「～へん」に関する意識は大変高くなります。この好機に、すべての児童が、「～へん」はどのように変化するか、生き生きと伝え、活躍できるようにしたいものです。熟語を探す活動でも、意欲的に漢字辞典を活用する姿が期待できます。（例「木材・言語・日時・金銀・王球・米粒」）



ここがポイント！ 教師の支援

- 本事例では、36人在籍学級を想定していますが、一つのグループの人数に合わせて取り上げる熟語数を調整し、分担するようにします。
- 「へん」が具体的にどのように変化しているか、その観点をあらかじめ共有しておく場合は、教科書に示されている「土へん」について全体で調べる活動も効果的です。
- 同じ熟語同士で集まって調べた内容は、右のように半紙にまとめて、元のグループで伝える際の発表資料に活用します。また、毛筆で範書する場合に備え、担当した熟語を納得できるまで書く時間を設けることも考えられます。
- グループに戻った際の発表では、質疑応答や付け足しなど活発な交流を促し、その様子を全体に紹介します。【王へんの変化に関する資料】



この後、全体で六つのへんの変化を比べ、共通する事項（右上がり、右端がそろそろ等）を取り出し、「ゆずり合い」という原理・原則を導きます。

<学習後（1か月後）の児童の感想>

- グループの友達が「なるほど」としっかり聞いてくれたことを今でも覚えています。
- 新しい漢字を習うとき、書写で発表してくれた「へん」のある漢字も出てきて、「このように変化するんだってよね。」



Q 対話の対象を広げ、必然性のある対話にするにはどうすればいいですか？

A 解決に向けて地域の人々との対話が必要となる学習問題を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

水産業は、食料を確保する重要な役割を果たしていることに気付くとともに、課題解決に向け、自分ができることは何かを考える力

本時の流れ

1 漁協でのインタビュー取材をもとに、島の水産業の現状を確認する。

2 水産業者の努力や工夫に気付くとともに、漁獲量の減少、就労人口の減少など多くの課題があることを知る。

3 水産業が活性化するために島の水産業のよさやPRしたいことを探り、リーフレットを作成する。

4 リーフレットを基に全体で交流していく中で、さらに認識を深めるとともに、自分の学びを振り返る。

リーフレットに何を載せれば、島ハモが有名になるかな？

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

日本の食料生産は、国内自給率が低くて輸入に頼っているんだな。
水産物も例外ではなく、生産量が低下して輸入量が増加しているな。



教科書の資料から、なぜ水産物の生産が減少し輸入が増加しているのか、日本の水産業は持続可能な産業として成り立っていくのか等の問いをつなげ、「島の水産業を活性化するために、自分たちにできることは何か」という「学習のまとまりを貫く課題」を設定しました。

児童は、この課題を解決するためには、島の水産業の現状を確かめ、関係者にアドバイスをいただく必要性を感じ、水産業に携わる方々と対話しつつ課題を解決していきました。

ここがポイント！ 教師の支援

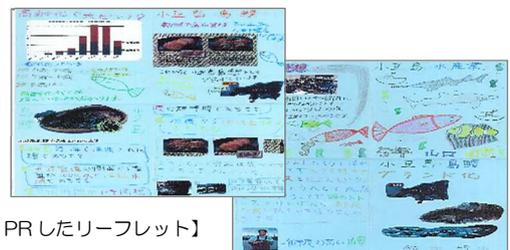
本単元の内容のねらいの一つは、水産業に従事している人々の工夫や努力、水産業は食料を確保する重要な役割を果たしていることに気付くことです。そこでまず、島の水産業に関わるさまざまな取組を調べ、水産資源の保護や「のり」養殖技術の改善、「島ハモのブランド化」等の工夫や努力に気付いた上で、後継者不足や漁獲量の減少等の課題の克服に向けて、自分たちにできることは何かを考えるようにしました。

児童は自分たちにできることとして、「島の水産物をPRするリーフレットをつくる」というめあてを設定しました。



【グループでの対話の様子】

島ハモのよさって何かな。
味？ 栄養？ 値段？



【島ハモをPRしたリーフレット】

＜学習後の児童の姿＞

島の水産業に関わる方々は、漁獲量の減少や後継者不足といった課題と向き合い、養殖技術の向上や島ハモのブランド化等、さまざまな努力をされていて、食生活を支えてくれました。これからも、私たちの協力できることを考えていきたいです。



【全体交流の様子】

Q 対話を通して考えを広めたり、深めたりするにはどのような工夫がありますか？

A 異なる考えを比較したり、問題場面を図や式と関係付けたりする場を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

よりよい考えや事柄の本質について話し合うことを通して、思考過程を表現したり多面的に考察したりする力

本時の流れ

1 学習課題を把握するために問題場面に関わる挿し絵を提示する。

2 自分の考えた方法で、●の個数を求める。

3 全体で交流し、式の意味を説明し合う。

4 友達との交流を通して、互いの考えを比較・検証することによって自分の考えを振り返る。

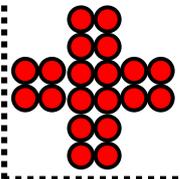
【単元の概要】(全4時間)

式の形に着目して数量や数量関係を読みとり、計算の範囲を小数に広げても同じように「分配・結合法則」が成り立つことを理解するとともに、計算方法を発展的に考え活用する単元です。

本時は、個数を求める式を立て、よりよい考え方やことからの本質について話し合う場を設定しました。

その後は、少数に数を広げて問題場面に応じて式に表したり式の表す意味を読み取ったりするようにしました

【本時の学習】(2時間目)



<学習前の児童の姿>

これまでも、図や式に表して考えたことがあったよ。図を囲みながら考えればよく分かりそうだね。



本時の学習課題を把握するために問題場面に関わる挿し絵を提示し、いちごの個数の求め方は、一つではないことを知らせ、興味をもたせました。そして、「工夫して、いちごの数を求めよう」という学習問題のもと拡散的な思考を促し学習を進めました。

ここがポイント! 教師の支援

黒板に式と図をランダムに掲示することで児童が式と図を対応させながら意欲的に説明できるようにしました。式と図を結び付ける活動を通して、「式に表す力」「式をよむ力」を伸ばしたいと考えました。

自力解決した考えを説明するだけでなく、対話を通して分かったことやきまりについて自分の考えを相互に説明し合う活動を取り入れました。考え方は違うけれど答えは同じという、計算の仕方に違いがあることに気付かせ、物事を多面的・多角的に見ることの面白さやよさを実感することができました。

多様な考え方があることに気付く。多面的・多角的にものごとを見る。異なる考えからよい考えを導き出す。



【図と式をつなぎ、互いの考えを比べる対話】

友達の考えを聞くことで、自分が気付いていなかった新しい解決方法を見つけることができました。このように、他者との対話を通して、自分の考えを広げ、思考過程を表現する力や多面的に問題を考察する力が付くと考えます。

<学習後の児童の感想>

自分の考えが一番いいと思っていたけれど、みんなの考えを聞くことで、自分が思いつかなかった式もあったよ。



Q 児童の多様な考えをまとめるにはどうすれば良いのですか？

A 対話を通して意見の共通性に注目させ、クラス全体で考えながら分類しましょう。

本時、こんな力を育てたい

乾電池2個の場合のつなぎ方を考え、電池同士がつながっている極や配線の形態に注目して、回路の違いを捉えようとする力

本時の流れ

1 乾電池2個の場合、どのようにつなげば回路になるかを考える。



2 考えた回路を発表し合い、仲間分けをする。



3 つなぎ方の特徴が分かるような名前を考える。



4 本時を振り返り、感想や新たな疑問等を書く。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

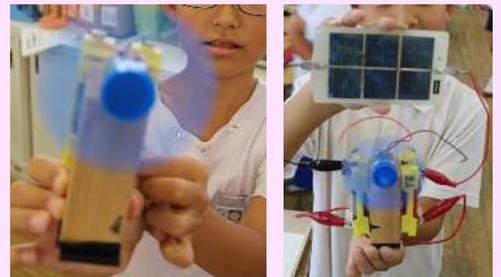
- ・自分のハンディファンを「もっと速く、もっと長い時間」回し続けたいな。
- ・乾電池2個にすれば願いがかなうかもしれない。



ここがポイント！ 教師の支援

①多様な考えが出るよう、自由試行の場を設定する。

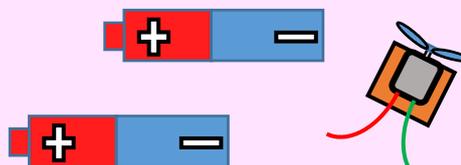
児童が「もっと〇〇したい！」と願いをもてば、自然と対話も活発になる。単元の最初に自由試行の場面を設けることで自分なりの課題や疑問が生まれ、



それを解決したいと更に意欲を高めることができた。

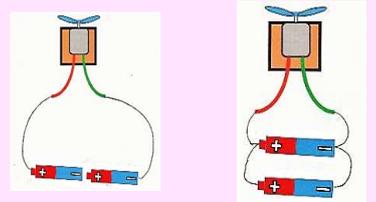
②自分の考えをモデル図として可視化させる。

全ての児童に自分なりの意見を持たせるため、乾電池やモーターのモデル図を操作させながら考えさせた。具体物や半具体物を操作することで考えをもちやすくなる児童が増えた。



③モデル図をもとに、考えの相違に着目して分類させる。

本時では出てきたつなぎ方に対して、同じつなぎ方だと思ふものを集めた。同じだと思ふ理由を問い返すと、「回路が分かれていないから。」等と理由をつけて答えた。また分類したつなぎ方の共通点を問い返すと「二つの電池が+極と-極でつながっているものばかりだ。」と答え、二つのつなぎ方への理解が深まった。単元を通して見ると、教師が問い返さなく



プラマイつなぎ

ひょうたんつなぎ

ても、児童同士でやりとりをする姿が増えた。

＜学習後の児童の感想＞

①どちらか速く回るのが気に入りました。

②つなぎ方が考えたので、深からつなげます。つくるのが楽しいです。

③プラマイとひょうたんつなぎの違いが分かった。

④えらばれてよかったです。プラマイつなぎでせんじうキをはやくしても、と長く回すようにしていきたいです。

Q 主体的な対話を促すために、どのような工夫がありますか？

A グループ編成や思考ツールを工夫しましょう。

本時、こんな力を育てたい

対話を通して、収集・分析した情報を比較・関連付けながら、目的に応じた新しい考えを生み出そうとする力

本時の流れ

1 大東川のごみ問題について各調査チームが収集・分析・報告した情報を振り返る。



2 グループに分かれ、寄せられた情報を利用して、大東川をごみから守るためのアイデアを話し合う。



3 全体で、各グループから提案されたアイデアについて質問や意見交流を行う。



4 本時の学習を振り返り、これからの「ごみなっしプロジェクト」の活動に見通しをもつ。

【単元・授業の概要】

地域を流れる大東川の環境問題を探究することを通して、環境保全や自然愛護の考え方と実践力を育てる単元です。

本時は、大東川をごみから守るためのアイデアを考えます。主体的な対話を促すために、互いの学びが活かせるグループ編成、集めた情報の比較・関連付けを支援する思考ツールを取り入れました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

大東川に一番多かったごみは、ペットボトルだったよ。地域の人に協力してもらいたいけど、町の人や役場の方は、大東川のごみのことをどう思っているのかな。



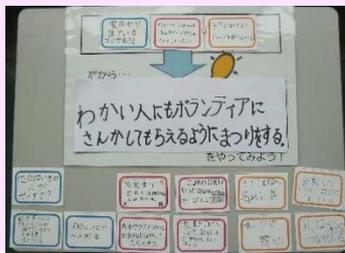
児童は、大東川のごみ問題について地域の人との協力を得るため、「大東川のごみの実態」「町の方の意識」「役場の取り組み」の三つの実態調査チームに分かれて情報の収集・整理・分析に取り組んできました。得られた情報は、カードにしてグループに配布されています。

ここがポイント！ 教師の支援
グループ編成の工夫

グループでの話し合いは、一つのグループに三つの実態調査チームから各2名ずつが集まり、計6名程度で行いました。グループの中では、自分とは違うチームの友達に、興味のある情報について質問をしたり、自分の調査内容をアピールしたりすることで、様々な方向から解決策を吟味することができました。

対話を活性化させる思考ツール

各調査チームから寄せられた情報カードの中から、大東川をきれいにするために活用できそうなものを選びました。そして、それらを作業シートの上に並べることで、必要な情報が焦点化され、大東川を守るための新しいアイデアが生み出されました。全体交流の場では、根拠と自信をもってそれらを提案することができました。



【作業シート・情報カード】



【積極的に対話する児童】

<学習後の児童の感想>

町が計画しているクリーン作戦に、若い人にも協力してもらうために参観日に宣伝したいです。ごみに興味をもってもらうために「リサイクル祭り」を開くのはよい考えだと思いました。



Q 音楽活動を中心に互いの考えを広めたり深めたりする対話を実現させるためにはどのような工夫がありますか。

A 友達と一緒に考えたり、比べたりする交流を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

友達と一緒に歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりして拍の流れを感じ取る力

本時の流れ

1 「おちゃらか」の遊び方を知る。

2 二人組になって、自分たちで決めた速度で歌って遊ぶ。

3 速度の換え方を工夫し、発表し合う。

4 友達との交流を通して、「おちゃらか」の遊び方について振り返る。

【授業の概要】

友達と一緒に遊びながら歌う楽しさや喜びを味わう活動を通して、我が国に伝承されているわらべうたのよさや面白さに触れる題材です。

本時は、わらべうた「おちゃらか」を通し、友達との一体感を味わいながら、いろいろな速度で音楽に合わせて遊ぶ喜びを味わうために、「対話的な学び」の視点から授業づくりを工夫しました。歌や遊び方、ルールを知ること、日本のわらべうたのよさや、面白さに触れることができると考えました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

遊び歌は楽しいな。でも、「かったよ」のところが、そろわないよ。



まずは、歌に集中するように、動きを付けずに歌を歌いました。そして、手本を参考にして、「おちゃらか」の遊び方を確認しました。

そこで、「わらべうたをうたってたのしもう」という本時のめあてのもと、交流の場を設定しました。

ここがポイント! 教師の支援

二人組になり、徐々に速度を上げながら繰り返すようにしました。しかし、勝ち負けにこだわってしまい、一連の動作を正確にできない児童もいました。

そのような児童には、全体交流で発表している二人組の遊び方に着目させ、二人の息を合わせる、二人のリズムや速さを合わせる、止まらないようにする、正確にするなどに気付くようにしていきました。

このような対話的な学びを通し、児童は速度の換え方の工夫をしたり、遊ぶ人数を変えたりして、友達と一緒に全身でわらべうたを歌って楽しく遊ぶことができました。



【全体交流の後、速度を工夫】

<学習後の児童の感想>

友達と息とリズムを合わせると、どんなスピードでも「おちゃらか」はできるよ。

三人でもできることが分かったから、人数を増やしてみよう。



Q 共に考えを深め合う対話を実現させるためにはどのような工夫がありますか？

A 明確な観点をもたせて、必要なときに自由に交流できる場を設定しましょう。

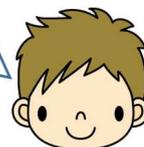
本時、こんな力を育てたい

自分が描きたい生き物は、どんな体の特徴で、どこに住んでいて、どんなことをするのか等、対話を通してイメージを深める力

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

ぼくは強い竜になりたいんだ。強い感じにしたいから、どんな体の竜にするか詳しく考えよう。



まず、自分の生き物を詳しく想像して絵に表したいという思いを表出させ、学習のめあてをもたせました。

本時の流れ

1 秘密の卵から生まれる生き物を詳しく想像して、絵に表したいというめあてをもつ。

2 「どんな体」「どんな場所」「どんなことをする」を基本に、友達とどのような質問をし合うかを全体で確認する。

3 質問し合いたい児童は交流し、製作をしたい児童は製作することを共通理解し、それぞれに製作をする。

4 友達との交流を通して、自分のイメージが深まったことを振り返る。

ここがポイント！ 教師の支援

なりたいたい生き物を詳しく思い描くためには、「どんな体」「どんな場所」「どんなことをする」の三つの観点から想像することが大切だと話し合いました。それらの観点を基に、友達とさまざまな質問をし合うことで、自分が想像していなかったことも考えるようになり、イメージが深まることを例示しながら確認しました。

その後、絵に表していく際に児童は、「どんな体」「どんな場所」「どんなことをする」の三つの観点を明確に意識しながら、表現の工夫を考えていくことができました。また、友達の生き物を見る際にも、それらの観点から質問したり、表し方のよさを見つけたりするようになり、交流の内容が深まりました。

製作と交流の場所を区切り、製作中に友達と交流する必要のある児童は自由に交流の場所へ行って話をしてもよいことにしました。そうすることで、製作に没頭したい児童、友達と質問し合ってイメージを深める等交流したい児童、それぞれのニーズに合わせるようにしました。また、交流の場所には、想像の手助けとなる資料写真等を複数掲示し、それらを参考にしながら交流したり、イメージを深めたりできるようにしました。

【授業の概要】

不思議な秘密の卵から生まれる、自分がなりたいたい生き物を想像して絵に表す題材です。

本時は、自分が思いついた生き物の特徴や住んでいる場所等を具体的に思い描くために、友達と質問し合う場を設定しました。そうすることで、生き物のイメージがより深まると考えました。

＜学習後の児童の感想＞

友達と質問し合うと、自分の生き物がどんどん進化して、想像がふくらみました。話し合う前よりいい生き物になりました。



【3つの観点を明確に示す板書】

Q 児童の対話から、本時身に付けさせたい知識・技能を焦点化していくためには、どのような支援が効果的でしょうか。

A 意図的指名で意見をコーディネートし、見直す視点を板書に明示しましょう。

本時、こんな力を育てたい

これまでもっていた視点を増やしたり広げたりして、自分の考えを修正し再構築する力

本時の流れ

- 1 前時に行ったみそ汁の試しの調理について交流し、実の工夫を見付ける。
- 2 全体で交流し、視点を増やしたり、広げたりする。
- 3 新たな視点で、自分のみそ汁の実を見直す。
- 4 見直した実を交流して自分や友達の良さを見付けたり、本時を振り返ったりする。

【授業の概要】

日本の伝統的な日常食であるご飯とみそ汁について学ぶ題材です。基本のみそ汁の調理に加え、自分の考えたみそ汁の調理を行うことで、家庭生活をよりよくしようとする実践力を養おうと考えました。

みそ汁一皿の中の実を工夫する学習を行うことで、第6学年での1食分の献立作りへと学びが繋がっていきます。

【本時の学習】

<学習前の児童の感想>

家族や自分が好きな実を組み合わせたよ。

前時までに「家族のためのみそ汁」の計画を立て、計画に基づいて、自分の考えた実を使って試しの調理を行いました。グループの友達の作ったみそ汁も試食し、感想を付箋紙にメモをしておくようにしました。実際に調理することで、新たな視点に気づき、修正点を見付け、友達に伝えたいという意欲を高めました。

順	実	切り方
1	とうふ	さいの目切
2	わかめ	そのまま
3	細ねぎ	小口で切り

理由 前とちがう材料で作ってみたから。
わかめは味が好きなので自分で作るようになって食べてほしいから。
家のみそ汁を自分で作るようになった。

ここがポイント！ 教師の支援

しかし、交流では、感想の交流になってしまうグループもありました。そこで、全体交流では、前時のワークシートを把握しておき、意図的指名で児童の意見をコーディネートしながら、本時に気付いてほしい視点（「色どり」「旬」「栄養のバランス」）を表出させ、各視点が明確になるように板書していきました（下写真）。その際、児童自身が「その視点について、自分はどうだったか。」と確認したり、友達と互いの実の組合せについてアドバイスし合ったりしながら、自分自身の見直しの視点につなげていきました。

全体で「色どり」「旬」「栄養のバランス」の視点を再確認することで、児童は各視点から確実にみそ汁の実を見直すことができました。また、それぞれの視点について、どんな実があるか実物を用意することで、色どりや旬をイメージできるようにしました。



【本時の提示物】

★ 旬	おいしい 栄養価が高い	さつまいも ナス
★ 色どり	（さつまいも） （にんじん） （わかめ）	（にんじん） （細ねぎ） （なす）
★ 栄養のバランス	（大根） （わかめ） （とうふ）	（じゃがいも） （細ねぎ） （油揚げ）

【本時の板書】

<学習後の児童の感想>

家族の好きな組合せだったけれど、「旬」「色どり」「栄養バランス」を考えて、にんじん、じゃがいも、わかめに変えました。家でも早く作ってみたいです。

順	実	切り方
1	にんじん	いちぼう切
2	じゃがいも	細切り
3	わかめ	そのまま

理由 にんじんは毎日の食事で、色合いが良くなるから。
5年生学習の味噌汁に入っているみそ汁にしたかったから。

【本時のワークシート】

Q 運動の課題解決に向けて、主体的に対話できる授業を創るにはどのような工夫がありますか？

A 運動の軌跡を視覚化し、児童がいっしょに学び合える協同的な学習の場面を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

個人の伸びを得点化し、グループの合計点で競争することで、協同的に課題解決していく力

本時の流れ

1 より高く跳べる秘密を見つける。

2 理想的な跳躍と比較し、課題を焦点化する。(見る視点を明確にするために、教具などで視覚化する。)

3 グループでの協同的な学習を通して、それぞれが課題解決を図る。

4 記録測定を行い、グループの伸び(個人の伸び)を表やグラフに残す。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

バーに当たってしまうよ。高く跳ぶために、何をどうすれば良いのだろうか。



まず、グループで記録を伸ばしていく中で、目標記録に近づくにつれ、どうしてもバーを落としてしまったり跳べなくなったりと思い通りの跳躍ができなくなってきます。技能向上を図る際、確実により高く跳べるポイント(知識)を学習する必要があります。

そこで、理想の動き方をもとに、「踏切から着地」「助走から踏切」と動きを区切って、焦点化されたポイントを学習します。また、助走のリズムを声に出し、「トン・トン・ト・ト・トン」などの口伴奏で共通理解を図ることで、自分や友達に合う助走のリズムにも気付くことができます。

ここがポイント! 教師の支援

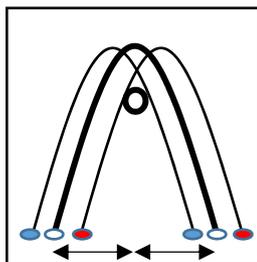
体育学習では、瞬時に消えていく運動の軌跡を視覚化していくことが必要となります。ICTを活用することで、映像で残すことができますが、より焦点化するためには簡易な教具で即座に示すことが重要です。

児童だけで課題を解決していくために、操作しやすく、再現性の高いものが準備できれば、自然と関わりや学び合いが生まれます。

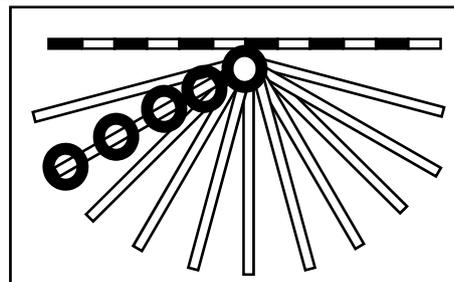
【授業の概要】

「走り高跳び」では、自分の記録の伸びや目標とする記録の達成を目指すために、リズムカルな助走から強く踏み切って跳ぶことができるように学習します。

陸上運動は個人の記録の伸びに学習が焦点化されがちです。そこで、集団化を図り、グループで競い合ったり学び合ったりする場を設定して、協同的な学習を保障しました。また、課題を明確にする手だてを準備し、グループで児童が解決していく活動を考えました。



【適切な踏切位置と着地位置】

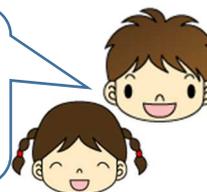


【助走の方向及び「トン・トン・ト・ト・トン」のリズム】

一人一人の伸びがグループ全体の伸びにつながることから、グループ全員がお手玉で示した適切な踏切位置と着地位置を確認したりラインテープや口伴奏で助走のポイントを見つけたりできました。協同的に学ぶことで、苦手な児童も得意な児童も一緒になって課題解決することができました。

<学習後の児童の感想>

友達とお手玉を使って、自分に合った踏切場所を見つけたから、高く跳べるようになったよ。



Q あらすじのまとめ方を深く学ぶためには、どうすればよいですか？

A 伝えたいことを明確にして、それが伝わるか確認しながら学び合わせましょう。

本時、こんな力を育てたい

「伝えたいこと」がよく分かるように、目的に応じてあらすじをまとめる力

本時の流れ

- 1 修正が必要な紹介カード（教師作成）を基に、見直しのポイントを確認する。
- 2 「伝えたいこと」がよく分かる紹介カードになっているか、チェックポイントを基に学び合う。
- 3 同じ国のグループの友達からもらったアドバイスを基に紹介カードを見直す。
- 4 自分が初めに書いたカードと比較し、「伝えたいこと」がよく伝わるようになったか振り返る。

【授業の概要】

世界の話を読み、目的に応じてあらすじをまとめて紹介する単元です。「はりねずみと金貨」で書き方の基本を学び、習得した力をおすすめの本の紹介で活用しました。

あらすじとは、心に残ったことを中心に、話の内容を短くまとめた文章です。同じ話を読んでも個々の感想は異なります。「伝えたいこと」が明確になれば、あらすじも違って来るはず。本時は、あらすじを入れた紹介カードが「伝えたい」内容になっているか見直しました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

「はりねずみと金貨」で学習したことを生かして、おすすめの本のあらすじを書いてみました。

最初は、若い夫婦を中心人物と考えて書いてみたけれど、人物の変化や「伝えたいこと」がうまく表現できなくて困ったな。

ここがポイント！

「伝えたいこと」があらすじにうまく表現できていないが、自分では気付いていない児童も多くいた。

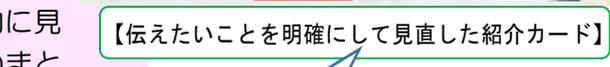
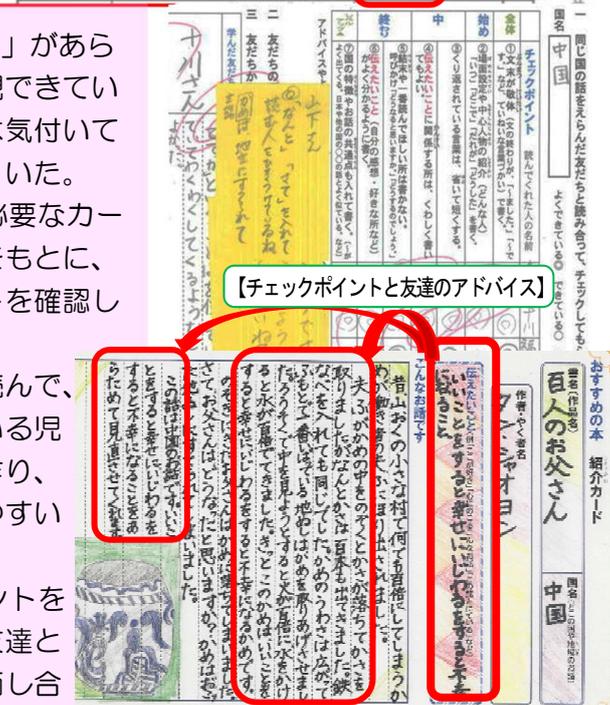
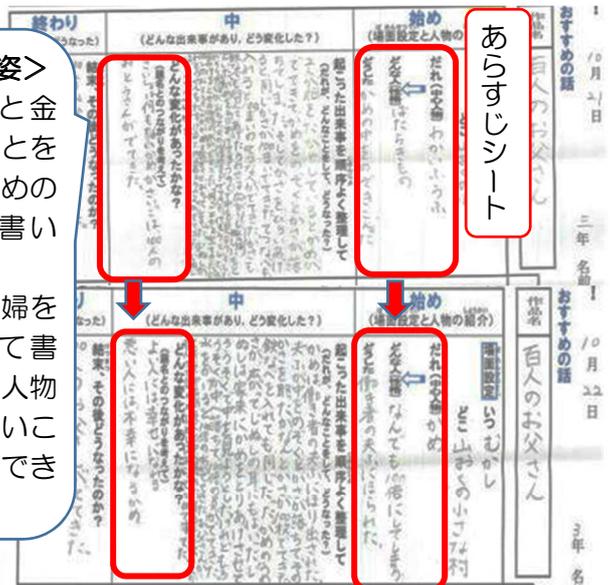
そこで修正が必要なカード（教師作成）をもとに、見直しのポイントを確認していった。

同じ国の話を読んで、内容を把握している児童でグループを作り、アドバイスがしやすいようにした。

チェックポイントを活用し、自分や友達と対話しながら評価し合うことで、主体的に見直し、あらすじのまとめ方を深く学ぶことができた。

<学習後の児童の感想>

チェックやアドバイスをもとに見直し、何でも百倍にする瓶が中心人物だと気が付きました。瓶を主語にして書くと、変化もよく分かりました。「伝えたいこと」を詳しく書いたので、友達からもよく分かると言われてもらえました。あらすじが自分で書けるようになって、うれしかったです。



【市の図書館に掲示】

Q 点画のつながりの大切さについて、どのように理解を促していけばよいですか？

A 「はね」の意義や適切な方向など、「なぜ」を考える活動を充実させましょう。

本時、こんな力を育てたい

「なぜ、はねるのか」などと具体的に考えることを通して、点画のつながりの大切さを理解し、文字を書く活動に生かす力

本時の流れ

1 児童が日常書いている平仮名のうち、はねの有無を比較して、はねる意味を考える。

2 はねが、次の点画に向かうために生じていることを理解し、ここから適切な方向について、日常書いている平仮名を通して確かめる。

3 はねの方向によってどのような筆順で書かれたか分かることを、日常書いている平仮名を通して確かめる。

4 児童の氏名を表す平仮名のうち、はねがある（あってもよい）文字を確かめ、点画のつながりを意識して書く。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

平仮名を書き始めたところから、そのときに見た文字ではねるかどうか決めていたなあ。印刷文字でも、はねはいろいろだよ。



平仮名のはねについては、厳密には字源をもとにした「か」の一筆目のみと捉えられています。ただ、本事例では、筆順にそって書き進める過程において、自然な筆記具（毛筆における穂先）の動きから生じたいわゆる「筆意のはね（はねだし）」も含めて扱っています。

対象となる平仮名（表記フォント：HG 教科書体）

い う え か き け こ さ せ
た な に は ふ ほ や ら り

ここがポイント！ 教師の支援

- 上記の平仮名について、児童のノート等からコピーを集めておきます。ここから、はねの有無双方の事例を「あるなしクイズ」形式で提示し、着目できるようにします。
- 「なぜはねるのか」という問いが児童から出されるように、先のクイズの事例で自分はどちらで書いているか確認することも有効です。そして、問いに対して多くの児童が自分の考えをもつための十分な時間の確保が重要になります。
- 「次の点画に向かうためのはね」という観点から、はねの方向が不適切な事例や正しくない筆順で書かれた事例を検討することを通して、「点画のつながり」を意識することにより、整った字形になることを実感できるようにします。

本事例では、上記の平仮名について、あえてはねを強調して示すことで、適切な方向につなぐとともに正しい筆順で書いていることが確認できるようにしました。

【授業の概要】

字形を整える際に「点画のつながり」という書く過程に着目することは、書写の特質に応じた見方・考え方につながります。本事例は、この重要性を理解する、つまり、「深い学び」となるように、児童の氏名と関連させて「はね」を取り上げました。なお、次の点画に向かってはらう場合にも広げることができます。

<学習後の児童の感想>

- これまでは、何も考えずにはねていたけど、次の点画へつなぐという大切さがよく分かりました。筆順とも関係していることにはびっくりしました。
- 印刷文字の平仮名で、「き・さ・り」などつながっている理由が分かりました。



Q 日本の歴史や伝統への理解や関心を深めるにはどのような工夫がありますか？

A 主な歴史的事象と身近な地域の遺跡や文化財をつないだ教材を作りました。

本時、こんな力を育てたい

天皇を中心とした政治が確立されたことを、身近な地域の歴史から深く学び、地域の伝統や歴史を大切にしようとする力

本時の流れ

- 1 これまでの学習を振り返り、学習問題をつくる。
- 2 考えの基となる資料を読み取り、自分の考えをまとめる。
- 3 それぞれの考えをグループ内で発表し、その後に話し合ったことをもとに自分の考えをまとめる。
- 4 身近な地域の歴史や自分の生活とつないで、本時の学習を振り返る。

いつも通っている道が、昔の国道だった。この道を通して都まで税を運んだのかなあ。



なるほど、この地域は讃岐の国のほぼ真ん中にあるし、綾川を利用すれば海まですくだなあ。



【香川県埋蔵文化財センターより】

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

天皇を中心とした国造りや仏教の力を借りた政治が行われていたよ。でも、道路や橋が整っていなかった時代に、四国などの遠い場所まで天皇の政治や仏教の教えは届いていたのかなあ。

「天皇を中心とした政治は、讃岐の国でも進められていたのか」という学習問題を設定し、学習問題に対する予想をマグネットの位置で表示させました。



＜学習問題に対する児童の予想＞

- ア 力を持った天皇や貴族は都に住んでいるから
- イ 讃岐の人々が税を納めていたり、讃岐に役所があったりしたら進められていると言えるが、分からない
- ウ お寺は全国各地にありそうだから

ここがポイント！ 教師の支援

これらの予想を基に、何について調べたらよいかを整理しました。そして、「仏教とお寺」「税を運ぶ道」「役所と役人」の三つの事象について調べようということになりました。

教材を作るに当たって、身近な地域の遺跡や文化財を、歴史の大きな動きとどうつなげれば児童の深い理解につながるのかを、教師自身が明確にもっておくことが大切です。

＜学習後の児童の姿＞

- 私たちの生活する地域に国府があり、讃岐国の中心であったことに驚きました。いつも、近くにある石碑は何だろうと思っていただけで、やっと謎が解けました。
- 讃岐国にも国分寺があるので天皇中心の国造りが進められていたと予想したけれど、お寺だけでなく、役所や南海道という都に続く道が作られていたり、綾川が国府と港をつなぐ役割をはたしていたりしたことが分かりました。古代の人の知恵はすごいと思いました。

Q 事象に潜む規則性を見付け出し、楽しみながら深く学ぶにはどんな工夫がありますか？

A 立体を展開したり、展開図から立体をつくったりする活動を通して、辺や面がどうなるのかを確かめてみましょう。

本時、こんな力を育てたい

図形の構成要素に着目して立体図形を捉え直し、平面と立体を往還しながら立体図形の特性を見いだす力

【本時の学習】（5時間目）

<学習前の児童の姿>

直方体の時のように垂直や平行に気を付けると、立方体の展開図がかけそうだ。



立方体の展開図を考える際には、構成要素とその関係に着目させるとともに、具体物の操作を通して考える活動を設定しました。

また、既習事項を教室に掲示しておくことで、本時の課題解決のヒントとして生かせるようにしました。

本時の流れ

1 立体の辺どうしの関係に着目することで、学習への見通しをもつ。

2 不完全な展開図をもとに、完全な展開図にする方法を考える。

3 2の活動での気づきを基に様々な展開図を考え、グループや全体で交流する。

4 直方体の展開図と比べながら、立方体の展開図をまとめる。

ここがポイント！ 教師の支援

組み立てると、一面足りなかったり、面が重なったりする展開図を提示し、正しく立方体にするための改善方法を考えさせました。また、直方体と立方体の共通点を、本時の課題解決に生かせるようにするために、それぞれの図形の構成要素に着目させました。

自力解決の場面では、辺や面のつながりや位置関係を念頭で考えて、ノートの方眼を利用して展開図をかかせる活動を取り入れました。また、考えた展開図を、すぐに表出できる教具（下写真）を取り入れることで、平面と立体を往還できるようにしました。

面や辺などの図形の構成要素に着目することで、立体図形の捉え直しができ、深い学びとなりました。



【平面と立体を往還して考える児童】

【単元の概要】（全12時間）

単元前半では、直方体・立方体の展開図を作図する活動を通して、図形の構成要素に着目しながら、立体図形の性質について調べていきました。

単元後半では、立体図形に触れながら、その特徴や性質を整理していきました。

<学習後の児童の感想>

向かい合う面は隣にこないことが分かりました。隣り合う面を移動させることで、違う展開図になることも分かりました。



Q 児童の深い学びを実現するためにどのような工夫がありますか？

A 既習事項と結び付けて考えることができるような教材を用意しましょう。

本時、こんな力を育てたい

既習事項の磁石の性質と比較しながら、電磁石に電流を流した時の電流の向きと電磁石の極性について考える力

本時の流れ

1 電磁石に電流を流した時の極性について既習事項から予想を立て、それを基に考えた実験方法を発表する。



2 電磁石の極の性質について実験を行い、実験結果をグループでまとめる。



3 グループごとの実験結果を発表し、全体で交流し、考察する。



4 電磁石に電流を流した時の極性についてまとめ、振り返りを書く。

<学習後の児童の感想>

電磁石にはN極、S極はないと予想していたけれど、実験してみると磁石と同じようにN極、S極がありました。電流の向きを変えると極が反対になりました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

電磁石は電流を流すと磁石と同じように鉄を引き寄せる性質があることが分かりました。

電磁石も磁石と同じようにN極やS極があるのかな。実験して確かめてみたいな。

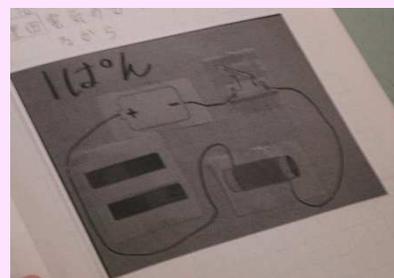


ここがポイント！ 教師の支援

【既習事項をもとに予想を立て、実験方法を考える】



(考えた実験方法の説明)

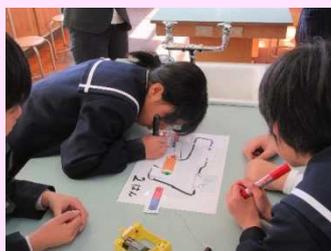


(実験方法を写真でノートに貼る)

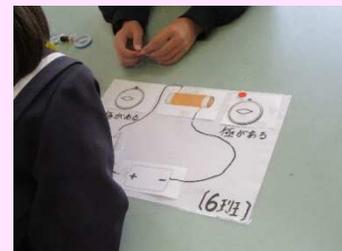
上のように、既習事項を基に、小ホワイトボードに必要な実験材料の図を用意しておき、それを使って、グループごとに予想を確かめる実験方法を話し合うようにしました。話し合いにおいては、回路を操作して、実験方法を確認できるようにしました。

また、個人のノートにも同様のものを貼り、確認しやすいようにしました。

【電磁石の極の性質について実験を行い、実験結果をグループでまとめる】



(実験結果を回路図へ書き込み)



(図に記入し結果を視覚化)

実験方法を示したホワイトボードの回路図の中に、各グループでの実験結果を書き込むようにさせ、視覚的に分かりやすいようにしました。

Q 児童の考えや思いを基に、学びを深めていくためにはどのような工夫がありますか？

A 思考ツールを活用し、それぞれの考えを可視化して擦り合わせ、集約していく場を設定しましょう。

本時、こんな力を育てたい

地域の一員として、地産地消を広げるために、自分たちができることを話し合い、解決策を考え出す力

本時の流れ

1 地産地消を広げるための解決策について、自分の考えをまとめる。

2 根拠を説明しながら、自分たちができる効果的な方法について全体で意見を交流する。

3 これからどのように学習を進めていくかについて話し合い、今後の計画を立てる。

4 本時の学習を通して、地産地消を広げるための解決策について自分の考えを振り返る。

【授業の概要】

「食」という視点から、地域の人や環境を探究する単元です。特に、本単元では「地産地消」をキーワードとして、地元の食材をもっと知ってもらうために自分たちができることについて考えていきました。

本時は、「地産地消を広げるために、〇〇したらいいのではないか」という児童の思いを、より実現可能なものにするために、思考ツールを用いて思考の可視化を図りました。課題を「見える化」することで、多様な考え方と照らし合わせることができ、さらなる学習意欲の向上にもつながりました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

地産地消を広げるために、自分たちができることは何だろう。考えはあるけれど、本当にできるかどうかは分からないな。

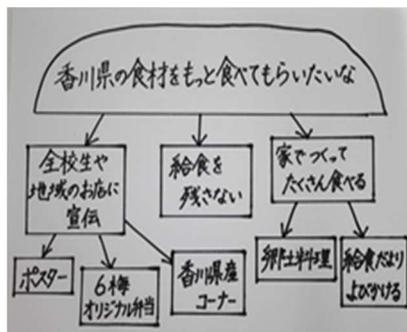


まず、児童は、これまでの学習や生活経験から、香川県産の食材を食べてもらうための方法について考えました。アイデアを広げるために、「地元産の食材を食べてもらうためのアイデアチャート」を活用し、考えを整理しました（下写真①）。

ここがポイント！ 教師の支援

次に、出てきたアイデアから自分たちができることを選び、まとめていきました。「全校生や地域のお店に宣伝するためにポスターをかく」「お店に香川県産のコーナーをたくさん作ってもらう」「給食を残さない」「給食だよりで呼びかける」など、多様な考えが出ました。そこで、児童が選ぶ視点として、「それほど時間がかかりすぎない」「効果的かどうか」「食材のよさやおいしさが伝わるか」「自分たちができるか」の四つを挙げ、それぞれにマトリックス表にまとめました。そして、交流の結果、「香川県産の食材を生かしたお弁当を作ろう」という意見にまとまりました（下写真②）。

しかし、まだ今後の見通しがもてず、「弁当を作る」ことがイメージできずに意識が高まっていない児童もいました。そこで、児童にとって身近なところ（学級→学年→全校→家庭・地域）から、地産地消を広げていくよう声かけを行い、「まずは、給食で出してもらえり弁当を考えていこう」という解決策にたどり着きました。



アイデアチャート（写真①）

一番よい方法を考えてよう。

	時間	効果的	食材のよさ	給食だより
ポスター	◎	○	△	○
お弁当	○	◎	◎	○
香川県産コーナー	△	◎	○	△
家で食べる	○	△	◎	○
給食だより	○	○	△	△

マトリックス表（写真②）

＜学習後の児童の感想＞

初めは何をどうすればよいか分からないところがあったけれど、地産地消を広げるためにお弁当作りをすることはとてもいい方法だと思いました。自分たちのオリジナル弁当を作るのが楽しみです。



Q 自らの思いや意図を表現させるためには、どのような工夫がありますか？

A 要素を相互に関連付けて思考できる活動を行いましょう。

本時、こんな力を育てたい

複数の音楽の要素を関連付けながら、自分の思いや意図を表現し、伝えようとする力

本時の流れ

1 前時までの学習を振り返り学習課題を設定する。

問 歌詞の様子を伝えるためにどんな工夫をすればいいか？

2 歌詞の様子を表すために、「強弱」「速さ」「歌い方」を工夫する。

3 グループごとに発表を聴き合い、ふせんで互いに評価し合う。

4 学習を振り返り、前時からの変化をまとめる。

児童は本時の学習を通して、要素同士をつなぎ、言葉の抑揚を意識して「強弱」「速さ」「歌い方」を変化させることで、自分たちの思いや意図を伝える手段を身に付けることができた。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

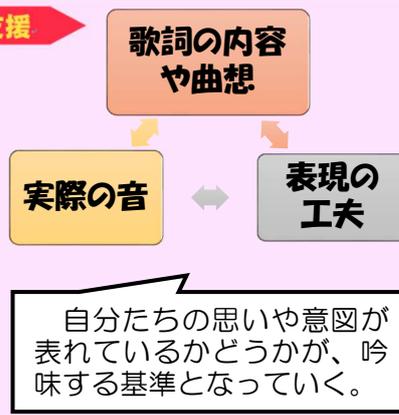
「待ちぼうけ」のお話はおもしろい！だけど、このまま歌うだけでは、うまく伝わらないなあ。



前時までには学んだ言葉の抑揚だけでは、自分たちの思いや意図が十分伝わらないというつまずきから、「歌詞の様子を伝えるためにどんな工夫をすればいいか」という学習課題が児童の中から起こってくる。そこで、声楽家の演奏を鑑賞することで、「強弱」「速度」「歌い方」の三つを変化させるとよいと考え、本時はそれらを用いて、自分たちの思いを伝える活動へとつなげていく。

ここがポイント！ 教師の支援

児童が自分たちの思いを手掛かりに工夫を考えていく際に、実際の表現と思いや意図が乖離しがちになる。そこで教師が「伝えたいことが伝わっている？」と問いかけることで、右図のようなサイクルが生まれてくる。理解することと実際の学びがイコールになるために必要な過程である。



＜学習後の児童の感想＞

言葉の抑揚を意識することで言葉がよく伝わり、強弱や速さ、歌い方を工夫することで、様子や気持ちを伝えることができたよ。この学びを他の学習でも生かせるかな？



Q 鑑賞活動で互いの見方を深めさせるためにはどのような工夫がありますか？

A 視点を限定した交流を設定し、感じを表現する条件を共有させましょう。

本時、こんな力を育てたい

互いの見方を認め合いながら、感じたことを話し合う活動を通してより深く作品を鑑賞する力

本時の流れ

1 自分たちがつくった心のもようカードを、形・色・線の感じに注目し、喜怒哀楽に分類する。



2 グループで提示された気持ちに一番ふさわしいカードを選ぶ。



3 友達や自分の見方のよさや面白さを見つけ、伝え合う。

【授業の概要】

前時に自分の気持ちをいろいろな形や色で表現した「心のもよう」カードを、グループで分類しながら鑑賞する題材です。

最初に、他のグループの友達が製作したカードを、あえて「喜怒哀楽」の四つに単純に分類することにより、それだけではない、いろいろな感情の表現に気付くことができるように工夫しました。

この活動を経て、その後の教科書に載っている人物像等のアート作品の鑑賞でも、共有した視点で捉える見方が生かされました。

【本時の学習】

<学習前の児童の姿>

形や色、ぬり方を工夫したから、楽しい感じやイライラした気持ちが表現できたよ。友達のカードはどうか。



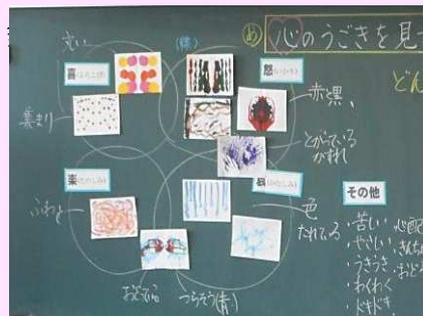
【心のもようカード】

友達の製作した「心のもよう」カードを、喜怒哀楽に分類しようとした時に、怒りと悲しみの混じった感じのカードはどこに置けばよいか戸惑う児童がいました。他の児童に聞くと「間におくとよい」という意見が出ました。そこで、板書に四つの感情の円を重ねながら枠を書くと、「これは線がぎざぎざしているから、怒りに近いのでは。」などと、詳しく吟味しようという姿勢が生まれました。

ここがポイント！ 教師の支援

グループで分類を進めていくうちに、喜怒哀楽だけではない感情の表現に気付いていきます。子どもが見付けた心の動きを「その他」として認めていくうちに、色の組み合わせから感じるイメージの違いなど、互いの見方のよさを認められるようになっていきます。

しかし、交流を通して自分の見方にこだわる児童もいました。そこで、形や色、線の感じなど、造形的な視点で分類し、一つの視点について、感じがあることを、具体的な理由とともに話し合わせることにより、同じ表現をいろいろな見方で見取ろうとするようになりました。



【黒板に分類した「心のもよう」カード】

<学習後の児童の感想>

初めは赤や黄色でうれしそうな感じと書いていたけど、〇〇さんの「いろいろな丸がとびはねているから、わくわくした感じ」という意見を聞いて、何かを楽しみにしている感じもあるのかなと思いました。



Q よりよい生活を目指し、課題の解決法を考えさせる有効な手立てはありますか？

A 実感を伴った理解により、多面的な視点をもたせるようにしましょう。

本時、こんな力を育てたい

夏と冬の衣服を比較して、それぞれの特徴や着方の違いを見出し、自分の生活に生かそうとする力

本時の流れ

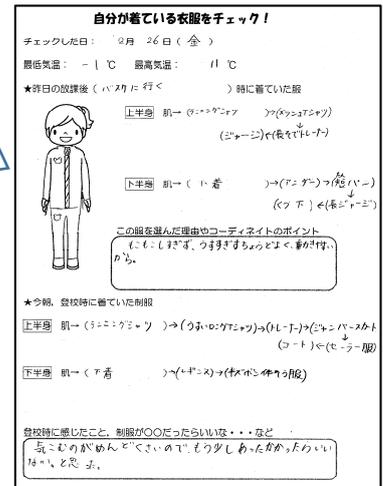
- 1 2月頃に着ていた衣服と現在（夏）の衣服の枚数や長さ、形などを比較する。
- 2 夏と冬の衣服の特徴、着方の違いを表にまとめる。
- 3 涼しい着方の工夫の効果について、実験で確かめる。
- 4 涼しい着方の工夫を短い言葉でまとめる。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

着やすくて手近にある服を適当に組み合わせて着ている。半袖、短パンにすれば涼しくなるよ。

前日の放課後に着ていた私服をワークシートに書き出した後、2月に記録しておいたワークシートと比較させました。枚数、長さ等の違いによって、どのくらい涼しさに効果があるのか、子どもたちが疑問をもち始めたところで、実験の場を設定しました。



【2月に記録しておいたワークシート】

ここがポイント! 教師の支援

「〇〇すると涼しい」と感覚的に分かっているけど、その理由を理解し、より効果的な方法を意図的に実践している児童は多くありません。日常的に何気なく行っている、衣服の選び方や着方の工夫の効果を実験的に裏付けることで、生活の中で生きて働く知識・技能として定着させたいと考えました。

その際、自分の肌で感じたり、数値で比較したりすると、涼しくするための工夫の効果を実感できます。

そこで、ドライヤーと傘袋を使って通気性の違いを確かめたり、帽子の内外を放射温度計で測ったりする実験、右の写真のような色違いの手を着用する実験を行いました。



【実験：色で涼しさは変わるのかな?】

視覚的・感覚的に捉えたり、数値で確かめたりすることで、涼しさには、布の色や素材、日よけの有無も関係していることに気づき、季節や状況に合わせた快適な着方について理解を深めることができました。

＜学習後の児童の感想＞

何気なく服を選んでいただけで、布地や枚数、色が変わるだけでこんなにも涼しさに違いが出て驚きました。風通しや日光も意識して私服を選ぶようにしたいです。



【自分の工夫を検証】

【授業の概要】

夏を涼しく、快適に暮らすための工夫について、衣生活と住生活を関連付けながら捉えていく題材です。

本時では、まず2月の記録と現在の様子とを比較し、冬と夏の衣服の特徴や着方の違いを見出していきました。次に、衣服の長さ、色、布地等によって、涼しさにどのくらいの違いがあるのか、実験を通して実感できるようにしました。既習の「涼しい住空間の工夫」を想起させることで、「風通し」と「日よけ」が共通した工夫の観点であることを捉えられると考えました。

Q 技の習得時間を短縮し、活用・探究まで到達させるためには、どのような工夫がありますか？

A 簡単な感覚づくりの運動から取り組むことで、深い学びへとつなげることができます。

本時、こんな力を育てたい

感覚づくりの運動で習得した知識や技能を新しい技と関係付けて考えたり、動きの質を高めたりする力

本時の流れ

1 感覚づくりの運動のやり方がわかる。

2 グループでお互いの動きを見ながら、感覚づくりの運動の「できばえ」を上げていく。

3 感覚づくりの運動の「できばえ」が上がったら、技の難易度を上げて挑戦する。

4 難易度を上げてできたら、その難易度で技の「できばえ」を上げていく。

【授業の概要】

「マット運動」では、基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったり、それらを組み合わせたりすることができるように学習します。

感覚づくりの運動からスモールステップで学習していくことで、技に必要な技能や知識を身に付け、それらを活用して、効率的で美しい動きを探究していく授業を構想しました。また、単元終盤に発表会や競技会を設定することで演技（連続技）の構成についても学習していくことができます。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

マット運動が苦手な僕には、できない技ばかりでおもしろくない。
感覚づくりの運動は簡単にできるから、おもしろくない。



いきなり難しい技を扱うと運動の苦手な児童は、技ができるまでに時間がかかり、マット運動の楽しさを味わうことができません。いきなり技を扱うのではなく、技につながる感覚づくりの運動から学習していくことが大切です。簡単な運動で成功体験を積みながら、技能や知識を身に付けることで意欲が高まり、既習事項を活用して新しい技に取り組むことができます。

ここがポイント！ 教師の支援

感覚づくりの運動ができるようになったら器械運動特有の「できばえ」のレベルを上げるように助言します。「できばえ」を意識することで、技が上手になったり、美しくできるようになります。「できばえ」の視点は児童と一緒に創るとより効果的です。

【できばえの視点】

- 体を大きく使う（手を遠くに着く、足が伸びている、など）
- なめらか（音がしない、ゆっくりから速くなる、など）
- 見栄えがよい（指先まで伸びている、膝が閉じている、着地がピタッと止まる、など）

【補助倒立前転につながる感覚づくりの運動】

- ① 跳び箱の上に足を乗せた状態からの補助倒立（段を下げていくと補助倒立に少しずつ近づけることができる）
- ② 手押し車から前転（手押し車の足を持つ位置を「腰→胸→顔→頭」と段階的に高くすることで、倒立前転に近付ける）

簡単な感覚づくりの運動だからこそ、児童全員ができ、できた動きがどう技につながっていくかを発見していく授業になりました。また、「できばえ」を意識することでマット運動が得意な児童も意欲的に何度も運動に取り組む姿が見られました。「できる」を保障したからこそ児童の思考が活発になり、技能も高めることができました。

＜学習後の児童の感想＞

感覚づくりの運動をしているうちに、技ができるようになったよ。
「できばえ」を意識すると、簡単な技も上達していることを教えてもらったから、おもしろい。



Ⅲ おわりに

「今までの自分の授業で大丈夫。」

そう思われる方もいるかもしれません。

しかし、「自分が知らないことを知っている自分の方が賢い」と話したソクラテスのように、今一度、「主体的・対話的で深い学び」の視点から自分の授業を謙虚に振り返り、授業改善に取り組んでみましょう。

子どもたちの夢と笑顔のあふれる授業をめざして・・・。



さぬきの教員 かかわりの三訓

一 共感的に受け止め

二 チームの力で

三 毅然と粘り強く



香川県教育委員会

さぬきっ子 学びの三訓

一 準備して

二 姿勢整え

三 しつかり聞こう



香川県教育委員会